

パラドックス—世俗のと仏教のと（2）

定方 晟

（ハ）嘘つきのパラドックス

パラドックスの有名なものに「嘘つきのパラドックス」がある。代表的なのは「クレタ人の嘘つき」であるが、以下、これとこれに類するパラドックスを挙げてみよう。

⑱クレタ人のエピメニデス（前6世紀）が「クレタ人はみな嘘つきだ」といった。もし、「クレタ人はみな嘘つきだ」というのが正しければ、エピメニデスも嘘つきだということになる。したがって、「クレタ人はみな嘘つきだ」ということは嘘だということになる。エピメニデスの主張はこうして、それと逆の結論に導かれる。

⑲ある枠の中につぎの文が書かれている。「この枠のなかに書いてあることは、ウソです」。この文は、本当だろうか？ ウソだろうか？

⑳ソクラテスいわく「プラトンの言っていることは嘘だ」
プラトンいわく「ソクラテスの言っていることは本当だ」

これらのパラドックスは言葉の遊びとしては大変面白いが、日常の会話ではパラドックスとして現われることはなく、人生を変革するような知見をもたらすこともない。そのことを上例（⑱～⑳）に即して述べてみよう（⑱'～⑳'）。

⑱'「クレタ人の嘘つき」の話はパウロの「テトスへの手紙1」にも現われる。パウロはクレタにいるテトスに訓示を与えて、つぎのようにいった。

実は、不従順な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多いのです。特に割礼を受けている人たちの中に、そういう者がいます。その者たちを沈黙させねばなりません。彼らは恥ずべき利益を得るために、教えるはならないことを教え、数々の家庭を覆しています。彼らのうちの一人、預言者自身が次のように言いました。

「クレタ人はいつもそつき、悪い獣、怠惰な大食漢だ。」

この言葉は当たっています。だから、彼らを厳しく戒めて、信仰を健全に保たせ、ユダヤ人の作り話や、真理に背を向けている者の掟に心を奪われないようにさせなさい。

（新約聖書「テトスへの手紙1」1：10～14）

「彼らのうちの一人」とは「クレタ人のうちの一人」（エピメニデス？）を意味するであ

ろう。とすればここには⑩で説明されたようなパラドックスが生じる。しかし、この文を書いたパウロ自身は、これをパラドックスとして意識していない。彼は「預言者自身も嘘つきだ」などとは考えたことがないのである。パウロの言葉を読んだすべての人も同様である。これが言葉に正しく接する仕方である。

⑨ 「この枠のなかに書いてあることは、ウソです」のパラドックス性は、例⑩のパラドックス性を理解したひとには理解しやすい。野崎氏はこれを記号を用いて説明しているが、その必要があるだろうか。記号を用いることは、そうでない解説のときには気がつくような過ちを隠してしまう恐れはないか。氏の解説を引用しよう。

この枠の中に書いた文を、簡単のためにSであらわすことにしよう。そして、文Sが正しいと仮定してみる。すると、Sとは

Sはウソです。

といっているのだから、これが正しいとは、つまり「Sはウソだ」ということになる。これは最初の仮定「Sが正しい」に矛盾する。

では文Sがウソであると仮定してみよう。すると、

Sはウソです

というのがウソなのだから、Sはウソいつわりのない正しいことである。ところがこれも、仮定「Sはウソである」に矛盾する！（野崎『詭弁論理学』,pp.166-197）

野崎氏の解説文の最初の二つのSは

S = この枠のなかに書いてあることは、ウソです

であるのに対し、そのあとの「Sとは」のSは

S = この枠のなかに書いてあることは、ウソですはウソです

となっていないか。つまり、Sの概念がすり換えられていないか。すり換えられた概念をもってしてはいかなる推論も無意味ではないか。

この文に対する常識人の反応はつぎのようになるだろう。「この枠の中に書いてあること」まで読み進んだとき、まず枠の中に「この枠の中に書いてあること」を探すだろう。「・・・は、ウソです」まで読み進んでもなお、探すものがみつからないとき、かれらは当惑するだろう。これが常識的な読み方である。かれらにとって、「この枠の中に書いてあること」は「この枠の中に書いてあることは、ウソです」を意味しないのである。

かれらは結局こう結論するだろう。「書き手は肝心の文を書き忘れたか、これから書き入れるのだろう」。つまりパラドックスとは無関係に極めて常識的に解決してしまうのである。

ところが、論理学者はこれをパラドックスにしたてるべく、じつに面倒な解説をおこなう。中村氏がタルスキーの論を用いておこなっている解説も同様である。

タルスキーは任意の文Xに対して、

(1) Xは真である。⇔P

を、それぞれの文について真理を定義するためのシェーマと考えた。ここでXは文を名指す語であり、Pはその文自体が入るべきものである。ある文を名指すにはその文を括弧「・・・」でくくればよい。たとえば、

(2)「日本は島国である」は真である。⇔日本は島国である。

(以下、中村氏はこのシェーマを「この枠内に書かれていることは偽である」のパラドックスを論じるのに利用する。)

この枠内に書かれた文を簡略化してCとし、シェーマ(1)を当てはめると、

(3) Cは真である。⇔この枠内に書かれてあることは偽である。

が成立する。ところがCの定義から

(4) この枠内に書かれていること=C

(4)を(3)に代入すると、

(5) Cは真である。⇔Cは偽である。

が出る。これは明らかにパラドックスである。(中村『パラドックス』、pp.62~64)

私は中村氏の推論に疑問を抱く。(4)の「この枠内に書かれていること=C」はおかしい。中村氏はそれより前の(2)のあとで、「この枠内に書かれた文を簡略化してCとし」たではないか。すなわち、「この枠内に書かれていることは偽である=C」としたではないか。Cの内容が前と後ですり換えられているではないか。

⑳。例⑳はパラドックスとして面白い。プラトンがソクラテスにまともに反撃して、「ソクラテスの言っていることは嘘だ」といったとしたら、あとはソクラテスとプラトンが互いに相手を嘘つき呼ばわりする水かけ論が始まるどころだった。

ところが、プラトンは「ソクラテスの言っていることは本当だ」といった。そのソクラテスが「プラトンの言っていることは嘘だ」といっているのだから、プラトンの言は嘘だということになり、したがって「ソクラテスの言っていることは本当ではない」ということになり、ソクラテスの言は斥けられ、「プラトンの言っていることは本当だ」という、ソクラテスの最初の言葉と矛盾する結論が導かれる。

ただし、これも常識人のあいだではつぎのように解釈されるだろう。「ああ、プラトンは何か嘘をいったのだな。そしてプラトンは素直にそれを認めたのだな」と。そして、⑳の回答は、たとえば、つぎのようなケースとして想像されるだろう。

プラトン「わたしは腹はすいてない」

ソクラテス「プラトンはウソを言っている」

プラトン「ソクラテスの言っていることは本当です」

ここには何のパラドックスも存在しない。このように、実際の日常生活においては、コン

テキストによってパラドックスはつねに回避されている。これは人々が、学者がいうところの「自己言及の禁止」を無意識のうちに体得していることを示す。「自己言及」とは、ある命題がその命題自身に適用されることである。

同じことをタルスキーは「メタ言語」という言葉を用いて説明した。かれは言語に階層性があることを認め、対象言語とメタ言語とを区別した。「言語そのものの外にある事項について語る『対象言語』(object language)と、他方では、言語コード自体について語るための言語との区別である」(R・ヤコブソン著、池上／山中訳『言語とメタ言語』、勁草書房、p.108)。簡単にいうと、前者は「言葉ともの」に関わり、後者は「言葉と言葉」(つまり言葉の規則)に関わる、ということであろう。

「嘘つきのパラドックス」がパラドックスになるのは、ある命題がその命題自身に適用されるときである。パウロもわれわれも、そうならないよう無意識のうちに言語生活を営んでいる。「自己言及の禁止」の必要性を理解するのにつぎの格言は好例である。

②すべての規則は例外をもつ(=例外のない規則はない)

「自己言及の禁止」が存在しないときは、つぎのようになる。この命題が正しいとする。この命題も規則であるから、この命題も例外をもつことになる。この例外をもつとは「例外をもたない規則がある」ということである。これは最初の仮定と矛盾する。これはパラドックスである。

「自己言及の禁止」が存在するときは、パラドックスはなくなる。②が格言として通用しているのは、すべてのひとが暗黙のうちに「自己言及の禁止」を受け入れているからである。ひとが自分の家の塀に「落書きすべからず」と書いたり、講演会で「しずかに！」と怒鳴ったりしても、だれも(論理学者あるいは論理好きのひとを除いて)パラドックスだなどと騒ぎ立てないのも同じ理由による。それを目にしたひと、耳にしたひとは、落書きするのをやめ、喋るのをやめるだろう。それらの言葉が明確な意味をひとに示しているからである。

なお②は、このままでは自己言及に関係がないように見えるが、まとめて「プラトンは『自分は嘘をついている』と知っている」とすれば、関係があることがわかる。

自己言及はつねにパラドックスになるわけでない。その例。

②この文は肯定文である。

この文は肯定文でない。

これは「る」で終る文である。

これは「る」で終る文でない。(『逆説論理学』, p.135.)

「この文は肯定文である」という文は確かに「である」で終わっている。この文に自己言及があったとしても、パラドックスは生じない。だからといって、このような文がわれわれの

実際の言語生活に資するものはなにもない。

同種の議論に「グレリングのパラドックス」(ヘテロロジカル)がある。

㊦いま一つの言語(たとえば英語)をとり、その言語に属するすべての形容詞を考える。形容詞のなかで自分の表わす性質をもつものを「オートロジカル」、自分の表わす性質をもたないものを「ヘテロロジカル」と名づける。日本語の場合でいえば、「短い」という形容詞は短いからオートロジカルで、「長い」は長くないからヘテロロジカルである。こうするとすべての形容詞はオートロジカルかヘテロロジカルかのどちらかで、両方であるもの、どちらでもないものは存在しないようにできる。

このとき、「ヘテロロジカル」も形容詞に入れて考える。するとパラドックスが生ずるのである。というのは、仮に「ヘテロロジカル」をオートロジカルな形容詞としてみる。すると『ヘテロロジカル』はヘテロロジカルが真でなければならない。逆に「ヘテロロジカル」をヘテロロジカルな形容詞としてみる。するとこの仮定をそのまま述べて、『ヘテロロジカル』はヘテロロジカルが真となる。このことは、定義から『ヘテロロジカル』はオートロジカル』の成立することを意味する。こうしていずれにしても、「ヘテロロジカル」はオートロジカル、かつヘテロロジカルとなる。しかしこれはおかしい。あらゆる形容詞は、オートロジカルかヘテロロジカルかのどちらか一方に分類されなければならないはずであったからである。(『パラドックス』, p.12.)

グレリングに私は問いたい。「短いという形容詞は短いというが、いったい何を基準に短いというのか。もし「短いという形容詞は長いと主張する人がいたら、どのようにしてこれを反駁するのか。

中村氏はこのパラドックスを避ける唯一の方法として「ヘテロロジカル」というような形容詞を認めないことをあげる。私は「オートロジカル」という形容詞を認めるべきでない、と考える。「短い」は短くない(長くもない)。「赤い」は赤くない(青くもない、白くもない)。オートロジカルな形容詞など存在しない、と。形容詞はすべてヘテロロジカル(自分の表わす性質をもたない)である。

命題における自己言及の回避の問題は、数学の集合の研究と関連して浮上した。イギリスの哲学者バートランド・ラッセルがいわゆる「ラッセルのパラドックス」によって明らかにしたものである。これは重要な問題なので、中村氏の解説によってくわしく見てみたい。[]中の文は、わたしが補ったものである。

㊦集合を二つの組にわけ、第一の組に属する集合は自分自身を要素として含まないもの、第二の組に属するものは自分自身を要素として含むものとする。こうすると、どの集合も第一の組か第二の組かに入り、どちらにも入らないもの、両方に入るものは存在しないはずである。たとえば、人間の集合には、この集合そのものは含まれない。なぜなら、人間の集合は、文関数

Xは人間である

を満足するXの全体である。Xに代入して真な文章をつくるものは、「山田」や「吉田」や「高田」のような個々の人間の名前であるが、「人間の集合」であることはできない。人間の集合は山田や吉田のような具体物ではなく、抽象的なものであるからである。それゆえ、人間の集合は第一の組に属する。

しかし、無色のものの集合を考えると、

Xは無色である

は無色のものの集合によって満足される。集合は抽象的なもので、色をもたないからである。したがって、無色のものの集合は第二の組に属する。

このとき第一の組に属する集合の全体A — それは一つの集合であり、第一の組そのものとみられる — は、いったい第一の組に属するのか、第二の組に属するのか。

第一の組に属するとすれば、つまり

$A \in A$ [AはAの要素 (element) である]

とすれば、第一の組の定義によって

$A \notin A$ [AはAの要素ではない]

となる。

もし第二の組に属するとすれば [=第一の組に属しなければ]、つまり

$A \notin A$

とすれば、同じ定義によって

$A \in A$

である。これは明瞭なパラドックスである。(『パラドックス』、pp.40~41.)

つぎに野崎氏の説明をみよう。

②集合には、自分自身を要素として含むものと、そうでないものがある。「およそ考えられるすべてのものの集合」は前者の例であり、「すべての整数の集合」や「すべての実数の集合」は後者の例である。そこで次のような集合Hを考える。

すべての「自分自身を要素として含まないような集合」の集合H

いいかえれば、任意の集合Sについて、

集合Sが集合Hの要素である

ための必要十分条件は、

集合Sが集合Sの要素でない

ということである。

これには別に問題はなさそうである。しかし、この集合Hが、集合H自身の要素かどうかを考えてみると、たちまち逆説が発生する。実際、集合SのところにHをあてはめてみると、

集合Hが集合Hの要素である

ための必要十分条件は、

集合Hが集合Hの要素でない

ことになってしまう。これをラッセルのパラドックスという。(『逆説論理学』, p.168.)

ラッセルのパラドックスを記号を使わず、言葉だけで説明することはできないのか。それは大変むずかしいことらしいが、田村氏の書にそれに近い説明がある。

㊸ラッセルのパラドックス。(文章を多少アレンジする。)

(1) 自分自身を要素として中に含む集合を第一種の集合ということにする。

(2) 自分自身を要素として中に含まない集合を第二種の集合ということにする。

ここで、(3) 第二種の集合ばかりを集めた集合Sを考える。このSは第一種であろうか、第二種であろうか。

...

Sが第一種だとすると、SはS自身の要素になっている。ところが、Sは第二種の集合ばかりを集めたものだから、その要素であるSは第二種でなくてはならない。

逆に、Sが第二種であったとすると、Sは第二種の集合ばかりを集めた集合Sの要素である。すなわち、SはS自身の要素であるので、Sは第一種でなくてはならない。

いずれにしても矛盾が生ずる。(『パラドックスの世界 星間・逆説の旅』, p.265.)

どの説明も難解である。それだけに、ラッセルがこのパラドックスを避けるために、つぎのような提案をしたと聞くと、ほっとする。

㊸「集合SおよびSに基いて定義されるものは、S自身の要素になることはできない。」
逆にいうと、

「集合Sの定義が、S自身およびSに基いて定義されるものを要素として受け入れるような場合は、Sを正しい集合とは認めない。」

ということである。これを悪循環の原理という。これを承認すれば、前に問題となったU(「およそ考えられるすべてのものの集合」)、H(すべての「自分自身を要素として含まないような集合」の集合)などは正しい集合とは認められない。したがって、カントールやラッセルのパラドックスは未然に防げることになる。

(『逆説論理学』, p.172、以下による。)

ラッセルは非常に難しいことをいっているようにみえるが、じつはひとがだれでも無意識のうちにやっていることをいっているのである。たとえば、だれかが「みんな嘘ばかりいっている」といったとする。聞いているひとは、それをいった当人が「みんな」の中に自分を含めてそういったのでないことを、よく了解している。

これはひとが論理にルーズであることを示すのではない。かれらが言葉のルールをマスタ

一していることを表わしているのである。もし、このとき「それじゃあ、君も嘘をいつていることになるよ。みんな嘘ばかりいつている、というのも嘘なのかね」などというひとは、言葉のルールの外に出て遊びをしていることになる。

私の考えでは、論理（言葉の規則）は人間が存在しないところには存在しないものである。人間がその効用を認めたがゆえに創出したものである。しかし、言葉はア priori に完璧なものではなかった。言葉は混沌のなかから練り上げられ、生みだされた。思考錯誤が続けられ、役にたつ規則はもうけられ、無駄と分かった規則は廃止され、あるいは変更された。こうしてできたのが今日の言葉である。言葉における自己言及は真でも偽でもない。しかし、効用を求める人間は、自己言及は避けることが望ましいことに気づき、それを習慣とした。

そもそも、だれかが「SはSの要素である」といいたときに、「それは規則違反です」と抗議すべきである。「要素」という言葉のそのような使い方は規則違反である。ひとは「全体」と「要素」という言葉を対立する概念として用いることに効用を認めたからこそ、それをそのように用いることを規則としたからである。

嘘つきのパラドックスはさんざん人を悩ませてきた。これは多くの人を迷いこませる思考のジャングルである。人間がそれと知らずにすでに幼児期に脱しているジャングルである。ラッセルもこの問題にとり組んだが、幸いなことに、かれは自己言及の泥沼でもがき続けるのをやめ、自己言及を排除するほうを選んだ。悪循環にストップをかけるほうを選んだ。民衆が無意識のうちにとくに身につけていた慣習にかれも改めて従ったのである。われわれはそれを知り、「なあんだ」という思いを抱くとともに、言葉に対する信頼を取り戻す。それにしても、人間が自己言及のジャングルに迷わぬ方途を、難しい議論をへることなく、いつの間にか身につけてしまうということは驚くべきことである。